

審査論文の要旨

本論文は、紀伊国根来寺を取り上げ、中世後期における地方の顕密寺院の展開と寺院を中核として成立する地域社会の形成過程ならびにその形成要因を考察するものである。

従来、中世後期寺院史においては、行人方の台頭と武力行使を地方寺院の発展要因の基軸と考え、寺院を核とした新たな地域社会の形成を説いてきた。本稿は、こうした見方を排し、学侶の動向を注視することにより、一三世紀末の高野山大伝法院方の根来下山から天正一三年の羽柴秀吉による根来寺焼き討ちを経て、慶長期における智積院の再興までの長期にわたる根来寺の展開を描こうとするものである。

第一章「根来寺伽藍の成立」は、根来寺形成期の伽藍整備状況を整理するとともに、『根来要書』成立の背景および根来寺僧の歴史認識を考察する。一三世紀末の大伝法院方の高野山下山をもって根来寺の成立と見なす通説を批判し、一四世紀半ばまでは高野山末寺が残存するが、一四世紀半ばから一五世紀初頭にかけて伽藍整備・経済基盤獲得を通じて、高野山から自立した「根来寺大伝法院」となっていると述べている。

第二章「根来寺伽藍の展開」では、一二世紀初頭から一六世紀末にかけて根来に建立された堂塔坊院を文献史料から網羅的に収集し、伽藍堂塔の推移を考察した。一二世紀初頭から一三世紀末までは覚鑿以来の堂舎のみが存在していたが、一三世紀の大伝法院方の根来の地への下山以降、一五世紀半ばまでは徐々に子院が増加し、この間に中心的伽藍域が形作られたことを指摘した。また一五世紀末に入ると子院が急増し寺域も周囲へと拡大、一六世紀半ば以降に二度目の増加のピークを迎えるという傾向を見いだした。

第三章「中世後期根来寺の僧侶組織」では、従来不明確であった中世後期根来寺の僧侶組織の全体像を考察し、学僧の寺内における位置を解明した。根来寺では行人の台頭に伴う寺院運営の独占はみられず、学僧も寺院運営に関わっていたこと、また全国各地から根来寺へ修学のために訪れた客僧たちが衆徒に交衆し中心的な仏事に関与していたことを論証する。能化を頂点とした衆徒組織の構造を描き出している。

第四章「学山」根来寺の形成と根来寺客僧」では、客僧の存在形態や修学実態の変遷を考察している。一三世紀末から存在する客僧は、法会整備や教学研究が行われた一五世紀初頭までに増加し、一五世紀半ばには客坊に結衆して、一五世紀後半には教学上の頂点たる能化職を誕生させるなど、修学上で重要な位置を占めたことを指摘した。常住の学僧と北は陸奥国、南は薩摩国まで全国各地から集結する客僧からなる「学山」根来寺が誕生する過程を論証した。

第五章「学山」根来寺の再興—京都東山根来寺別院智積院—」では、「日誉自筆書状」の校訂と新解釈を通じて、論義を中心とする根来寺の仏事法会の実態、能化職相論の詳細について明らかにするとともに、秀吉による焼き討ち後、慶長年間に再興された京都東

山根来寺別院智積院に全国各地から学僧が再結集したことを解明した。またこれをもって「学山」根来寺の復興と評価した。

第六章「中世後期における客僧—高野山を事例に一」では、高野山における客僧の宗教活動を考察し、客僧とは、事相の修得、教相の修学、行の実践を深めるため他所から訪れた僧侶で、衆徒に交衆して階位を極める僧侶もいたことを明らかにした。従来山伏や修験者が中心であると考えられてきた客僧について学僧の比重が高かったことを論じている。

第七章「根来寺内における修験道の位置—「修験の寺」根来寺—」では、中世後期における根来寺内での修験道の位置や、山伏・修験者の存在形態について考察した。通常、地方顕密寺院においては、行人方に属する修験道や山伏と学衆方とが対立するが、根来寺の場合は、学僧と山伏とは協調関係にあり、学僧も修験活動を行っていることを指摘した。根来寺では修験道と山伏を許容した点が、他寺と異なる特性であると論じている。

終章「根来寺の展開と地域社会の形成」は、根来寺大塔の造営過程に注目し、その完成年を永正一三年（一五一六）とし、従來說を30年ほど引き上げた。根来寺山伏が周辺地域において積極的に勸進活動を展開し、資材調達を行うなど、地域社会に根ざした活動を行った事実を指摘し、土豪や百姓の子弟からなる行人方が根来寺を核とした地域社会を形成したと論じた。

以上、「学山」と「修験」を同居させた根来寺の特性を論じ、この両者が相俟って根来寺を中核とした広範な地域社会を形成させたとまとめている。